都市再生

まちの魅力を創造する

いま、「稚内から石垣まで」を合い言葉に全国各地で都市再生へ向けた取り組みが行われています。地域の特色を生かしたまちづくりのアイデアを政府もさまざまな形で支援しています。今回は、その中からまちづくり交付金を活用した都市整備事業と民間主導で行われている都市再生モデル事業の取り組みを紹介します。

名鉄・豊田市駅の西口広場。見事な照明が住民の目を楽しませている。

施策 PICK UP 2

ここがポイント●現在、政府では都市再生を進めています。国土交通省ではこれまでの「まちづくり総合支援事業」を都市再生に狙いを定めた「まちづくり交付金制度」へと改め、地方自治体を支援しています。また、都市再生本部では、まちづくりの優れた取り組みをモデル事業に選定するなど、地域主導の取り組みを応援しています。

ちいきジャパン

愛知環状鉄道・新豊田駅の照明。デッキ下も十分に明るくなるよう配慮されている。

名鉄・豊田市駅の西口広場。夕暮れ時になると、帰宅するサラリーマンや買い物客が行き来する。その足下を色とりどりのLED（発光ダイオード）がやさしく照らす。ビルに当てた照明は光のアーチにも見える。それを抜けると、これもLEDの光で装飾された愛知環状鉄道・新豊田駅へと続く。せわしない時間帯にもかかわらず、どこか落ち着いて見えるのは照明のせいだろうか。

愛知県豊田市では、中心市街地活性化をめざし、さまざまな都市整備事業に取り組んできた。なかでもユニークなのが"光流都市とよた"をテーマにした夜間景観基本計画だ。これは同市のランドマーク『豊田スタジアム』から名鉄・豊田市駅にいたる中心市街地、そして愛知環状鉄道・新豊田駅にいたるまでを光で演出するもの。

「バリアフリーの観点から街路灯を整備する機能照明と、市民生活の質の向上に資する景観照明とを両立させる取り組みです」と豊田市役所都市整備課の三浦浩さん。すでにスタジアムと駅東口の整備は完了し、昨年度は駅西口広場から新豊田駅へと至る歩行者通路を『まちづくり交付金』を利用して整備した。

まちづくり交付金とは、国土交通省が、全国各地で進められている都市再生の取り組みをより一層推進するために平成16年度から始めた制度。

まちを彩る 再生の灯り

駅前広場に若者が集い、活気が戻ってきた。

都市再生は地域の歴史や文化、自然環境を生かした個性あるまちづくりを実施することで、地域住民の生活の質の向上と地域社会の活性化を図ることが狙いだ。

そのため交付金の対象事業は道路や公園、河川、下水道、住宅、地域交流施設など社会基盤整備に始まり、市民が中心となって行うまちづくり活動なども含まれており、市町村の創意工夫や自主性を最大限生かすことができるようになっている。

豊田市でも、夜間景観の整備のほか、歩行者デッキのバリアフリー化、サインボードの整備、緑陰道路の整備など、多くの事業を掲げている。「例えば、花のあるまちづくり事業では、市民が参加して駅前広場や街路に花を植えました。そうしたソフト事業にも市町村の裁量で交付金を充てることができます。いま、広場には若者の姿が見られ、活気が戻ってきました」と三浦さん。

複数の事業を総合的に行うことで相乗効果をもたらす。まちづくり交付金の狙いが、徐々に成果を挙げつつあるようだ。

市民のためのまちづくり

まちづくり交付金制度は、市町村の自主性と裁量性を重視しており、地域住民のまちづくりへの参加を促すことにつながっている。

その好例といえるのが、群馬県館林市の取り組みだ。同市では、都市再生整備計画として7つの基幹事業を掲げている。その一つ「歴史の小径」整備事業が、まさに市民の視点を生かして行われているのだ。

同市の中心市街地は、館林駅からつつじの名所として知られるつつじが岡公園までの幹線道路沿い。その脇道には、江戸時代から続く造り酒屋やかつての武士階級の居住地の面影を残す鷹匠町の街並み、館林城土橋門、最後の館林藩主・秋本家ゆかりの邸宅など、地域の歴史をいまに伝える貴重な建築物が残っている。

これを散策路として整備し、市街地の回遊性を高めるのが「歴史の小径」整備事業の目的だ。すでに鷹匠町の界隈は、まちづくり交付金を利用した道路整備が行われている。

「街並みをどのようにデザインしていくか、地域住民とともに勉強会を作り研究しています。例えば石畳ひとつとっても、雰囲気を重視しつつ滑りにくい素材を選ぶなど、住民の視点を取り入れることが必要なのです」と同市役所市民参画推進課では話す。

現在は区民館として使われている昭和初期の建物。住民のアイデアを生かした修復計画が検討されている。

都市再生

まちづくり交付金で道路整備を行った鷹匠町の町並み。

まりづくり交付金で整備したポケットパーク。住民の意見を取り入れて噴水を作った。

万博会場として躍有名になった愛知県長久手町でもまた、住民主体のまちづくりが進められている。

同町には、名古屋市内から万博会場へ向かう東部丘陵線、いわゆる『リニモ』の路線が走っている。全9駅のうち6駅を擁する同町では、各駅周辺の駐輪場や緑道の整備など、住民の利便性を高める整備事業にまちづくり交付金を充ててきた。

なかでも、象徴的なのが『はなみずき通駅』前のポケットパーク整備事業だ。長久手町役場都市整備課の高嶋隆明さんは「この整備計画案は住民参加で生まれたのです」と話す。

長久手町では、ポケットパークの設計に住民の意見を盛り込むため『楽しい街角を創る会』を組織。住民や商店主らを中心にワーキング部会を作り、毎週のように議論を重ね、整備計画の内容を固めていった。

「最初はもっと木を植える予定でしたが、住民活動のスペース確保のために木を減らしたり、噴水のライトアップの色を人気投票で決めたりしました。柔軟なアイデアが盛り込まれた、まさに地域のみんなで創った公園なのです」と高嶋さん。

行政と市民が意見交換をしながら、ともに街を作っていく。そうした取り組みが、すでに全国で始まっている。

「伊勢河崎商人蔵」裏手に流れる勢田川。川沿いに蔵が並び、かつて舟運の要衝として栄えた往時を思わせる。

「伊勢河崎商人蔵」では、母屋や蔵を公開している。

まちの魅力を再発見

空き家を住民の手で改装した「暮らし体験・南町の家」。

都市再生本部では、他の地域にも参考になるような全国各地の先導的なまちづくりの事例を『全国都市再生モデル調査』の対象事業に認定し、支援を行っている。

三重県伊勢市のNPO法人『伊勢河崎まちづくり衆』の取り組みも、平成16年度のモデル事業のひとつに選ばれた。

伊勢の台所といわれた問屋街・伊勢河崎は近世から昭和の中頃まで舟運の要衝として繁栄し、商家を営む旦那衆が伊勢の文化を育んできた。街の目抜き通りである河崎本通りには、いまも古い商家や蔵が建ち並び、往時の面影をいまに伝えている。

「ここ数年来、街の外からも河崎を気に入ってくれた人が来て、空き家になった町屋や蔵を利用した店を開くなど、少しずつ街がにぎやかになってきています」と伊勢河崎まちづくり衆の代表を務める西城利夫さんは話す。

同団体が伊勢市から運営を委託されている『伊勢河崎商人蔵』もまた、江戸時代に創業された酒問屋『小川酒店』の建物を活用したもの。この建物は市が修復・整備し、母屋や蔵を公開しているほか、河崎まちなみ館（資料館）、蔵を利用したミニショップを備え、河崎界隈の"まち歩き"の拠点施設となっている。

あえて"まち歩き"と言ったのは、河崎のまちづくりの狙いが、単なる観光振興ではないからだ。西城さんは「もちろん多くの人に来て欲しい気持ちはあります。ただ河崎には歴史的な街並みとともに日々の生活を営む人がいる。あくまで生活の場、街の空気を感じとって欲しいのです」と話す。

その思いが実を結んだのが、都市再生モデル調査の対象にもなった『暮らし体験・南町の家』事業だ。これは住人有志が集って改装した空き町屋で、河崎を訪れる人に滞在してもらう取り組みだ。滞在日数を最低3日間としたのも、旅行体験ではなく生活体験をして欲しいとの思いから。「朝は神棚に手を合わせ、地元の八百屋で買い物をし、夜は風呂屋にゆく。そんな伊勢河崎の日常を体験してもらいたい。そして、その体験から得たものを私たちのまちづくりの参考にもさせて欲しいのです」と西城さん。

いま、全国各地で地域の創意工夫を生かした、さまざまな都市再生の取り組みが行われている。何気ない日常生活のなかで育まれてきた街の魅力を再発見する伊勢河崎の取り組みは、まさにどの地域にもあてはまるまちづくりの原点と言えそうだ。

「伊勢河崎商人蔵」前の町並み。歴史的な建物がよく保存されている。

撮影・向井 渉